

## 歯科医療の中に看護を求めて(そのⅢ)

歯科口腔外科 発表者 池田 てるみ  
細野 麗

### I はじめに

看護の機能を分けると、患者の健康問題への働きかけ、医療チームに関するもの、患者の家族および環境に関するものの3つに分けられる。前回までは、医療チーム編成上の問題から業務分析を実施し、各職種の性格を理解した上で、共通の医療目標の達成をはかるため、各職種の果すべき役割を知り、業務分担を行った。今回は患者の健康問題、特に口腔問題へ積極的に取り組み、外来看護の充実をはかりたいと考え新来患者を対象にアンケートによる意識調査を実施し、患者の実態を知ると共に、前回のチーム編成を、どのように患者に反映させたらよいか検討するため調査した。その結果を報告する。

### II 実態調査

#### 1 調査目標

- ① 歯牙や口腔に関する関心度を知る。
- ② 受診者のニーズの把握
- ③ 実態を知った上で外来看護の確立をはかる。

#### 2 調査方法

アンケートによる調査法を用いた。

#### 3 調査期間と対象

- ① 期間 昭和52年1月17日～2月28日迄
- ② 対象 225名の新患の中より
  - 入院中の患者
  - 本学の職員及びその家族
  - 本学の学生を除いた103名の中より無作為で85名を選んだ。

#### 4 調査内容、調査結果

##### ① 受診者の背景

##### (1) 年齢・性別

性	年齢	10才未満	10	20	30	40	50	60以上	計
男		3	4	12	3	2	9	2	35
女		6	8	12	6	6	9	3	50

(2) 現在の自分の健康について、どのように思っていますか。

	20	40	60	80	100
健康状態	健康である 68%			健康でない 32%	

(3) 血圧について、どのように考えていますか。

	20	40	60	80	100
血圧異常	なし 65%			あり 27%	回答なし 8%

② 歯牙や口腔への関心度

(1) 口腔衛生に対して(はみがき回数)

	20	40	60	80	100
はみがき	朝 57%		朝夕 29%	夕 13%	

朝昼夕 1%

(2) むし歯や歯槽膿漏予防で気をつけていること。

	20	40	60	80	100
予 防	していない 81%			している 19%	

③ 口腔疾患への関心度

(1) 歯牙や口腔の疾病に気づいて、すぐ受診しましたか。

	20	40	60	80	100
受診状況	受診しない 52%		受診した 48%		

(2) 受診理由

	すぐ受診した理由	当日の受診理由
1 症状があった	61 %	31 %
2 病名を心配	19	19
3 歯や口腔以外の身体的の疾患があった	8	9
4 なんとなく	0	6
5 専門医がいる	6	11
6 審美障害	6	0
7 紹介	0	24
8 予約制のため	0	0
計	100	100

④ 受診者のニーズ

(3) 受診しない理由

項	目	%	項	目	%
1	患者の認識	40	1	食物摂取困難	33
			2	症状軽減	18
			3	他科疾患への配慮	11
2	歯牙疾患の特性	26	4	審美障害	8
			5	口腔清掃希望	6
			6	消化器症状	5
3	治療上の問題	15	7	発音障害	5
			8	補綴物に関するもの	4
			9	自分の訴えを聞いてくれるか	4
4	心理的原因	12	10	術後管理に関するもの	3
			11	その他	3
5	経済的原因	3	計		
6	その他	4			
計		100			

① 受診者の背景

- ・ 年齢—患者は全年代に及び、20才代と50才代が多く、男性より女性が多い。
- ・ 健康状態—健康と思っている 68%  
健康とっていない 32%

健康でないと答えた人は歯科的疾患でなく、身体的疾患を持った人である。

- ・ 血圧—異常なし 65%  
異常あり 27%

循環器系疾患を訴える人が多かったため、血圧について、どのように考えているか質問して見た。

② 歯牙や口腔への関心度

(1) 口腔衛生に対して

- ・ はみがき回数

朝のみ57% 朝夕29% 夕のみ13% 朝昼夕1%で1日1回は全員が歯磨を実施している。

- (2) むし歯や歯槽膿漏予防で気をつけていること。



(3) 歯には1本1本それぞれに働きがあるがたとえ欠損があっても他の歯が代役をする。

(4) 死亡に至るまでになることは少ない。

などの理由で患者が自分の歯牙や口腔に対して価値感を持たない。

- ③ 歯と他臓器は別のものとらえていること。
- ④ 入院中の患者も含めると、全身的疾患を訴えている者がかなりいること。
- ⑤ 当院へは自覚症状が発現してから来院し、症状の軽減や食事摂取困難等直接心身の苦痛や消耗につながることに對して大きなニーズをもっていること。
- ⑥ 患者自身歯牙や口腔に対して意識して手入れの要求をすることは少なく、予防への関心が薄いこと。
- ⑦ 過去のう蝕治療による心理的、経済的原因が歯科受診の延期へつながっている場合のあること。

歯牙や口腔への認識不足や天然歯に対して価値感の少ないことに對して、はみがきを例にとつて考えると、患者は100%の者が少なくとも1日1回歯磨きを実施している。患者は1日1回歯ブラシを口腔内に入れることで、むしろ歯予防が出来ると感じているように思われるが、実際には触覚的な理解で満足してしまい、口腔内の状態を意識的に見る、すなわち視覚的にとらえて、歯ブラシを使っていないことが予想され、これが歯牙や口腔への無関心となり、無視され軽視されている原因ではないか。従つて疾病に罹患していても、無関心であるため、また生命にかかわる危機感も小さいので、自覚症状が出現してから受診する結果、う蝕が歯槽骨や顎骨まで波及し、重篤な口腔疾患への発展、更に関連した諸臓器へ影響を与え疾病を拡大することとなる。

口腔は顔面に位置し、肉眼視でき、最も観察しやすい場所である為、意識的に観察することが、疾病の早期発見、早期治療、更には予防も可能と思われる。以上の観点から、患者自身が目で見て観察し歯や口腔に関心をもたせる指導が歯科看護展開の第一歩と考える。

大学病院の特殊性として、他院よりの紹介患者が多く、苦痛や不安、心身の消耗の激しい者、他疾患を持った患者が多く来院するので、看護者の観察により適切な援助が要求される。疼痛や腫脹を訴える者の中に、他院で歯牙を抜去、その後抜歯窩の治療不全を来し、術後管理の必要性を患者が訴えたものが3%あった。

心理的、経済的理由により受診を敬遠した結果、自覚症状が出現してから治療をうけることとなり、従つて歯牙疾患は慢性経過を辿り、歯牙は自然治癒し得ない特殊性から、長時間の診療や数回の受診が必要となる。

#### Ⅳ おわりに

外来では病棟と違い生活基盤が家庭や職場にあり、生活の中の自己管理が中心で、歯牙や口腔への自己管理の第一歩は観察で、観察を含めた生活指導をすることであると思う。

今後の課題として 患者が口腔を観察する指導をどのようにしたらよいか検討すると共に、現在パンフレット等を配布しているが、それらが患者のためと思って看護者の発想に基いたものではなく患者の生活基盤にたったもので具体的なものを展開させたいと考えている。